

---

---

## VI 自己評価

---

---

# 自己評価

---

---

大学院医学系研究科・医学部の自己評価

岐阜大学大学院医学系研究科長 近藤直実

## (1) 総論

医学系の大学及び大学院の使命は教育，研究に加えて診療のトライアングル（3本柱）であり，これらを通して広く社会に貢献することである。この使命を遂行するために，教職員の組織がありシステムがある。これらの自己評価をすることは，その努力の評価のみならず成果の評価が重要である。教育は，良好なシステムと共に教員一人一人の十分で活力ある研究と診療によって裏打ちされてきたものでなければならない。すなわち，優れた研究者とより良くかつ高度な臨床能力をもつ医師によってなされなければならない。

そのためにはハードとソフトの充実が必須であるが，幸い本学ではハード面では文部科学省，学内外の多数の方々の永年にわたる御支援と御尽力のもと，平成16年4月に医学部・附属病院の岐阜大学柳戸地区への新築移転統合が成し遂げられた。医学部本館，そして全国に誇るIT化，多機能を有する附属病院である。さらに平成17年度には，本館に隣接して生命科学総合研究支援センター，複合福利棟，医学部記念会館が稼動を開始した。さらに図書館医学部分館も予算化された。共焦点レーザー顕微鏡，核磁器共鳴（NMR）をはじめ高度な研究機器，動物実験室，RI実験室も，本館と生命科学総合研究支援センターをあわせると相当に整備されてきた。平成16年4月1日からは全国的な国立大学の法人化（国立大学法人）がなされた。本学ではさらに多くの方々の御努力と文部科学省の御理解により医学部の部局化が認可され，岐阜大学医学部及び医学部附属病院は岐阜大学大学院医学研究科及び医学部附属病院となり，さらに平成17年4月1日からは，看護学専攻が認可されたことにより，岐阜大学大学院医学系研究科及び医学部附属病院となり，やっと旧7帝大などと同じように従来に比してより研究に重心をおいた部局となった。その結果，大講座（医科学専攻—分子・構造学講座，病態制御学講座，神経統御学講座，腫瘍制御学講座，医療管理学講座。再生医科学専攻—再生分子統御学講座，再生工学講座，再生応用学講座）よりなる大学院医学系研究科となった（巻頭の組織図参照）。このようにハード面は上記3事業により全国的にもひけをとらない充実がなされてきた。

目的，目標を達成するためには，いよいよソフトの充実である。この点については平成15年度，平成16年度は移転統合などの引越しをはじめハード面における物理的改革が中心になったので，平成17年度から本格的な改革に入った項目も少なくない。いずれにしても教育，研究，診療のトライアングルである（序文の図1，2参照）。

## (2) 教育

学部教育について，入試方法についても改革が進められており，平成19年度（平成19年1月・2月・3月の入試）からは定員が後期にシフトすることに決定した。なお平成18年2月の前期入試では競争率は16.3倍で過去の2倍近くであり，全国トップであった。後期も22.4倍であった。本学医学部は全

国利用型である医学教育開発研究センター（MEDC）と共にテュートリアル教育、模擬患者、CBT、クリニカルクラークシップなど常に全国をリードし医学教育とその改革に取り組んできた。本来の成果は人間性豊かで優れた医学研究者と医師の育成の具体的評価であるが、これは長期間の経過と評価法が確立されなければならないため容易ではない。当面の評価の一つに医師国家試験の合格率がある。テュートリアル教育開始後の学生の現役卒業生の成績は毎年 100%、すなわち全員合格が続いてきたが平成 16 年度は久しぶりに 100%を達成できなかつた。教育方法は、たぶん完璧なものはない。極めて近い将来へ向けて、テュートリアルを凌駕できるような次世代型の医学教育開発の提案を望むところであり、学部内各担当機関で鋭意検討が進められている。

大学院教育については、部局化に伴い種々の改革がなされてきたが、特に平成 12 年度からの昼夜開講型すなわち社会人大学院制度の導入により広く開かれた大学院になった。充足率の向上と何よりも内容の更なる充実とそれによる十分な成果が期待される。

### (3) 診療

診療については医学部附属病院の項で取り上げられているが、移転統合を機に全予約制導入、地域医療への多大な貢献をはじめ病める方々の立場によりたつた病院、IT 化により効率化、安全化の質的改善、高次救命センターなどを通して地域に多大に貢献するセンター病院としての機能を果たしてきている。病院長をはじめとするスタッフの努力の結果としての運営、経営の改善が著しい。今後は、世界に発信できる高度先進医療の確実な開発が幾つかの分野で進められることが強く求められる。それは大学病院の重要な存在理由でもある。そしてそれはトランスレーショナルリサーチの推進である。すなわち基礎研究が臨床応用に結びつくような基礎研究を通して診療開発を行うことである。

### (4) 研究

研究について、大学院である意義は何よりも研究である。研究の活性化とそれによる多大な成果であり、これを通して世界に広く社会貢献することである。大学院医学系研究科として平成 17 年度は幾つかの施策を打出し、取り組んできた。これは、研究活性化（医）のための支援事業シリーズ「その 1」から「その 7」で提案されてきた。これらは研究活性化のために必要な研究費、マンパワーそして何よりも優れた idea・意識改革のトライアングル（三本柱）である（序文の図 2 参照）。項目を列記すると

(1) トランスレーショナルリサーチ的視点の導入 (2) 特定の横断的研究プロジェクト立上げ (3) 論文エピソード集発刊 (4) 研究科内、研究科関連、学術研究発表交流会設置（別名：NaSNeL 研究会） (5) 大学院学位論文発表会の公開化の充実 (6) 競合的大型研究費獲得戦略（特定の横断的研究プロジェクト立ち上げ）再生（幹細胞、神経も含む）、神経疾患、タンパク構造・創薬（免疫・アレルギー）、がん、生活習慣病、など進行中 (7) 研究費の通常配分に加えて重点化配分 (8) 研究者相互の物的・思的協力体制強化 (9) 重点化プール助手配分 (10) 教員ポイント制導入 (11) 臨床教授など複数教授制導入 (12) 寄附金雇用助手制導入 (13) 基礎研究者育成スカラーシップ（同窓会基金） (14) 非常勤技能補佐員雇用の効率化 (15) 共通研究室及び機器の運営について (16) 研究科内再編の必要性の有無の検討開始 (17) 生命科学総合研究支援センター運営及びその方法に関する協力と有効重点的利用 (18) 自己評価のための現状と課題（第 6 号）発刊とそれを活用した業績、実績の調査と評価 (19) 研究成果の国際トップ誌への掲載（Nature, Science, New England Journal of Medicine, Lancet - NaSNeL ナスネルと名づけてみましたーなどへの掲載）と特許獲得と社会貢献の強化（報道も含む）

研究成果の重要な指標は、論文数（特に英文）、インパクトファクター（**impact factor**）、サイテーションインデックス（**citation Index**）、競合的外部資金獲得、受託・共同研究、発明、特許、学会活動等である。これらに関しては各分野ごとに相当のスペースをとって掲載してある。

全体的に集計したものを図1、2に示した。2003、2004、2005の推移をみると、論文総数、総インパクトファクターはいずれも横ばいであったが、英文論文数は増加傾向にあった。競合的外部資金による研究費の推移は微増の傾向がみられた。

これらの成果を全国における位置づけでみると、総合科学技術会議、**JST**、**ISI**のデータによれば岐阜大学の医学関連論文数（2002 - 2004）はジャンル別にみると種々であるが医学としてまとめると1043編で全国31位であった。これは大阪大の4分の1である。これは、教員数が大阪大のほぼ半分であることを考慮して教員割りにすれば2分の1になる。約10年前**Nature**に掲載された日本全国の医学系大学の医学論文数は教員割りにして岐阜大学医学部は5位であった。ここで全教員が最低今の2倍の英文論文を書くことを強く提案したい。それはそれほど困難なことではない。平均的に、1編の人は2編、2編の人は4編（この数字が目標であろう）となる。そしてそれにより、全国10位前後まで上昇する。平成18年度（2006）以降に大いに期待する。そして大きく社会貢献できることを期待する。

#### **(5) 教授会（議）、委員会、事務組織、個人情報保護法などについて**

教授会、教授会議をはじめ各会議の効率よく有意義な議事進行が進められた。

委員会組織の改革について、平成16年4月より大幅な改革、整理統合がなされた。

事務の組織と内容の改革について、種々進められてきた。

さらに個人情報保護法への迅速かつ十分な対応や危機管理マニュアル作成が進んでいる。

#### **(6) 連合大学院構想**

将来を見据えたソフトの充実による目標の達成のため、岐阜大学は現在、医、工と岐阜薬科大学との連合大学院構想を着実に進めている。

#### **(7) まとめ**

個性と特徴ある大学とはいえ、教員の人数から考えて、テーマを絞れば旧帝大級と互角に対応できるはずであり、実際に本大学院においてそのようなテーマの事例は少なからずあり、競合的研究経費を獲得し、それなりの成果があがっている。教職員1人1人の、そしてシステムとしての更なる意識向上と自助努力に期待する。

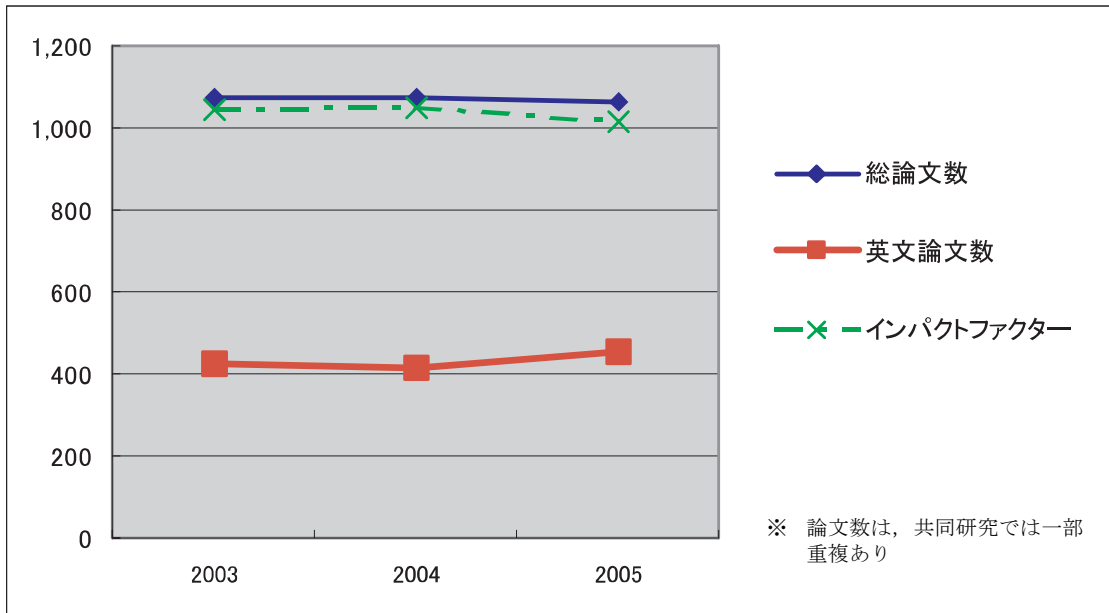


図 1：岐阜大学大学院医学系研究科・医学部・附属病院の業績

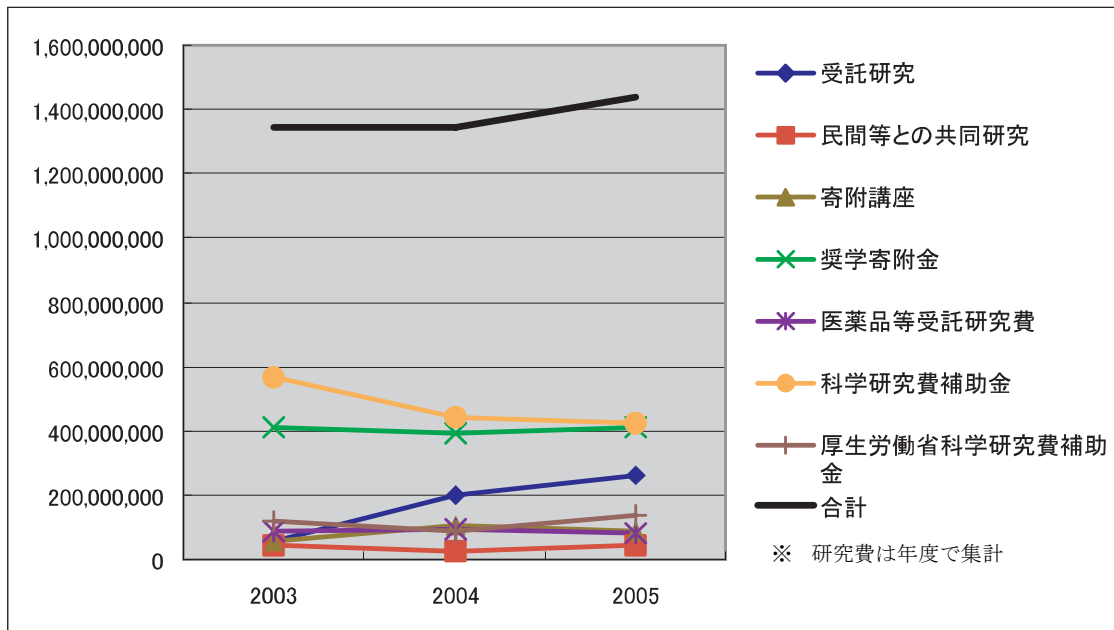


図 2：岐阜大学大学院医学系研究科・医学部・附属病院の競合的外部資金獲得

### (1) 教育

看護学科は平成 16 年度に完成年度を迎え、初めての卒業生を社会に送った。教育に関しては、平成 15 年度からは臨地実習を開始したので、その準備と実習施設の調整などに非常に多大な力を注ぎ、認可された教育課程に基づいた教育を実施してきたところであるが、①学生の脱落者が少なく、殆どの学生が 4 年間の在学で卒業をした。②授業科目の学習内容はシラバスを作成し、系統的に学べるようにした。③平成 16 年度卒業生は、看護師国家試験合格率 100%、助産師国家試験合格率 100%、保健師国家試験合格率 95%とそれぞれ非常に優秀な成績を残した。これらの結果から、概ね良好に教育における所期の目的を達成できたと考えられる。しかし、教育課程の見直しを求められることも多く、学内委員会で見直しの作業を行った。平成 18 年度から岐阜大学としても教養教育の重視を目標にした全学的な改正が行われたので、時期的にも一致し、新たな看護学科教育課程として平成 18 年度から実施されることになり、的確な時期に改正を行えたものと考えられる。

課題としては以下のことが残されている。①卒業必要単位数が 133 単位と多い。②助産師教育課程を学部位置づけるか、卒後教育に位置づけるかについて検討されていない。③テュートリアル教育に関する検討と評価の必要性が指摘されている。今後これらの課題について検討を重ねたい。また、看護学科教員は、担当する授業科目数と単位が多く、中には演習と実習指導も含まれるので、教員一人当たりの担当授業時間数が非常に多く、教員の尽力は相当なものであると評価される。

看護学専攻は設置されてまだ 1 年目であり、その評価を行うには尚早である。現状では設置認可された教育課程に基づき的確に運営されており、かつ、入学者も十分に確保できている現状である。

### (2) 研究

研究に関しては、各講座の研究実績に示されているように、それぞれの専門分野において各教員が努力をしているが、まだ十分な実績を上げているとはいえない。看護学が学問としてまだ歴史的にも浅く、学術雑誌数も少ないといった現状があり、加えて、看護学は実践科学としての実践教育が重視されているので、教員導に費やす時間が非常に大きく、研究時間を確保することが難しい。このような環境の中であるが、各分野において看護学の専門性を生かした研究成果をさらに挙げるのが期待されている。今後の課題としては、各分野の研究がその領域に限られている傾向にあるので、今後専門分野を超えた共同研究や、他大学との共同研究などを行うことが望まれる。看護学専攻では設置 1 年目でもあるが、教員の専門分野における研究指導が行われているが、今後、各専門分野における研究活動をさらに活発にしていくことが必要である。

### (3) 社会国際

教員の社会活動はそれぞれの専門性を生かし行われている。例えば、地域社会への貢献として、大学・短大・専門学校等への非常勤講師、専門職業人への継続教育の担当、学会や教育・職業団体での活動などをはじめ、高等学校への出前講義、一般住民を対象にした学習支援活動など多岐にわたっている。しかし、開かれた大学としての看護学科は、今後更なる改革が必要であろう。例えば、ホームページの充

実、地域社会の諸組織団体との連携、他大学看護学科との連携などは今後の課題として挙げられる。外国人留学生の受け入れは研究生として2名を受け入れたに過ぎなかった。看護学科としての特殊性があり、外国人が学ぶ体制や環境づくりは難しい面もあると考えられるが、国際化社会において今後考慮していくことも必要であろう。

看護学科学生では毎年外国へ留学生として送り出しているため、今後教育・研究で国際交流を活性化していくことも期待されている。

附属病院の自己評価

附属病院長 北島康雄

I 「大学院医学系研究科・医学部・同附属病院の将来構想」の3「医学部附属病院」を参照（P14~18）

医学系研究科・医学部自己評価委員会委員名簿

所属・職名	氏名	備考
医学系研究科長	近藤直実	委員長
附属病院長	北島康雄	
看護学科長	後閑容子	
医学系研究科教授	玉舎輝彦	
医学系研究科教授	小澤修	
医学系研究科 助教授・講師会	森田浩之	
医学系研究科助手会	長瀬清	
看護学科教授	武藤吉徳	
科長会議	藤原久義	
医学系研究科・医学部 事務長補佐	石山裕	
病院事務部総務課長	濱口清武	

医学系研究科・医学部自己評価委員会作業部会委員名簿

職名	氏名	備考
教授(医)	小澤修	部会長
教授(医)	紀ノ定保臣	
教授(医)	岩間亨	
教授(看)	武藤吉徳	
助教授(医)	永木正仁	
助教授(医)	齋尾征直	
助教授(医)	高塚直能	
講師(医)	高田知二	
講師(看)	杉浦浩子	
助手(医)	安田満	
助手(医)	川上秀昭	
助手(看)	若杉里実	



岐阜大学  
大学院医学系研究科・医学部・附属病院の  
現状と課題(第6号)

2006年3月 発行

編 集 岐阜大学大学院医学系研究科・医学部自己評価委員会

発 行 岐 阜 大 学  
大学院医学系研究科・医学部・附属病院  
〒501-1194 岐阜市柳戸1番1  
TEL.058-230-6000(代表)

印 刷 株式会社 コームラ

